

日本神経精神薬理学会 50周年「記念誌」のコーナー

今回は学会の運営に携わってこられた歴代理事長、大会長、名誉会員、現理事の方々から寄せられたメッセージのタイトルと、草創期の精神薬理学を支えた「赤城合宿」についてご紹介します。

2020年7月10日
50周年記念事業Working Group
「記念誌」編集担当：廣中直行

「記念誌」PREVIEW～JSNPの50 年を想う

「記念誌」に学会の運営に携わってこられた方々から21件のメッセージを寄せていただきました。ここで著者のお名前とタイトルを紹介します。五十音順です。敬称は省略しました。

安東 潔	神経精神薬理学会：どこから、どこへ
池田和隆	これからの日本神経精神薬理学会への期待
石郷岡純	私の精神薬理学と日本神経精神薬理学会への期待
尾崎紀夫	2006年三学会合同大会の思い出：鍋島先生とご一緒に初の全国学会大会長
加藤 信	精神薬理談話会の思い出
菊池哲朗	CINP/JSNP合同精神薬開発タスクフォースワーキンググループの活動に参加して
喜田 聡	日本神経精神薬理学会への感謝と期待
北市清幸	日本神経精神薬理学会のご縁があつてこそ
鈴木 勉	精神薬理学と共に
曾良一郎	第40回日本神経精神薬理学会を開催して
田中正敏	国際神経精神薬理学会議（CINP）への参加
砥出勝雄	学会との出会い、繋がり、そして自身の成長へ
中込和幸	JSNP50周年記念誌に寄せて～精神科の臨床研究について
鍋島俊隆	日本神経精神薬理学会（JSNP）と共に歩いて47年
成田 年	振り返れば、本学会の参加が今の自分の起源だった
野村総一郎	赤城山合宿の思い出
服部信孝	日本神経精神薬理学会50周年に寄せて～脳神経内科と精神医学の融合
樋口輝彦	本学会で活動した時代を振り返って
宮田久嗣	薬物・精神・行動の会から日本神経精神薬理学会までの道
山本経之	いまだに消えることのない記憶は——？
山脇成人	JSNP50周年を迎えるにあたって；JSNPと私～赤城合宿からCINPに至るまで

「赤城合宿」について

国立赤城青年の家(現在は「青少年交流の家」と改称)は群馬県前橋市の郊外、標高530メートルの高原にあり、現在の敷地面積は244,246m²、宿泊定員は400名を誇る一大団体研修施設です。当学会では群馬大学のお世話で1975年から1990年まで毎年8月にこの施設を利用して合宿研修を行いました。基礎・臨床の別なく清涼な空気のもとで親しく勉学に取り組んだ合宿は多くの会員に鮮烈な印象を残しています。

国立赤城青少年交流の家は、2021年(令和3年)4月に50周年を迎えます!

2021年(令和3年)4月24日(土)に50周年記念式典の開催を予定しています



この写真掲載にあたっては、国立赤城青少年交流の家の許諾を得ました。ご覧のように、青年の家は来年(2021)設立50周年を迎えます。JSNPとほぼ同時に生まれた青年の家。「文字の入ってない画像を送りましょうか?」と事業推進係の方に言われたのですが、むしろ「50周年」が入っている方が「記念誌」にふさわしいと考えた次第です。青年の家でも記念事業を計画しているそうです。そこで、**合宿当時の写真をお持ちの方がおられたらご提供願えないか**とのことです。ただし、人物が写っている場合は被写体の方からの公開の同意が必要です。何かお持ちの方は jsnp50anni@gmail.comまでご連絡ください。

「赤城合宿」の概要

合宿のねらいを田所作太郎先生は1976年のニューズレターこう書かれています。

参加者すべてが自由に言いたいことを気楽にのべ、何とか稔りある結論を出して行けるような若さあふれる会にしてみたい。平均年齢は少々上廻るかもしれないが、文字通り「青年の家」でやるピチピチとした勉強討論会そして親睦がはかれるような集まりにすることもできよう。

年によって変遷はあったようですが、私が参加した頃の合宿はこのようなスケジュールでした。禁酒でした。

第1日目：午後3時現地集合、オリエンテーション(、宿泊室割り当て(同じ所属の人が同室にならないようにします)、夕食のあと研修

第2日目：午前6時起床、寝具をたたみ、「つどいの広場」に集合して朝礼、国旗掲揚、各団体の紹介、ラジオ体操、交流行事(この間に巡回員が寝具の点検をします。たたみ方が悪いとやり直しです。交流では他団体の若者とフォークダンスなどします)。午前の研修、昼食後体育行事(必須)、その後研修(疲れが出ます)、夕食後、夜の研修。

第3日目：朝は前日と同じ。午前の研修、昼食後、退所式があつて解散します。

「赤城合宿」での研修

ニューズレター第9巻(1980)、群馬大学の林哲先生の報告から、研修の一端をのぞいてみましょう(抜粋です)。

今年(1980年)は田所教授の司会で「薬物と一般行動:その観察法について」をテーマに活発な討論が行われた。実中研の川口氏からは方法論が紹介され、よりよい観察を行うための提案があり、最後にラットおよびサルによる実例が示された。少しかわった問題提起といえば日周リズムの問題がそれであろう。

第2日目は各研究室で実際使用されている観察法の紹介を星薬大(鈴木)、群大(栗原)、三共(上岡)の各会員からしていただいた。

星薬大では標準薬と対比させながら未知検体を学生に試験させる方法をとっているとの報告があり、16項目にわたる各症状の有無についてチェックすることであった。この際「もだえ反応」というのがあったが、この観察は学生にとって大変むずかしいとのことである。

群大からも報告があった。なかでも学生は個々の現象に目を奪われ肝心な観察を忘れる傾向があり、特に運動量亢進、けいれん発現等にそれが著しいという。

三共中央研からは新薬開発の実際の中で一般行動観察法をどのように取り入れているかについて迫力十分な報告があった。問題点として観察項目によってはいわゆる「素人」と「玄人」で評価をめぐり大差の生ずることがよくあるとのことであった。

次回の「コーナー」予告

新しい学問を発展させる力は(暦年齢ではない)「若さ」であることを痛感します。

さて前回のクイズ。

赤城合宿の参加登録費はいくらだったでしょうか？

林先生の1980年の案内によると「3000円」です。これで2泊3日です。

次回は、当学会の国際交流「CINP」を取り上げます。

またクイズ：第1回のCINPは1958年、ローマで開催されました。この当時、日本からローマに行くにはどのくらいの時間がかかったでしょうか？

これには単一の正解はないかも知れません。日本航空の客室乗務員の回想録によって考えます。

ひとつの回答は次回の「コーナー」で・・・